

厭  
な  
彼  
女

厭だ。

厭なら別れりやいいだろうかと深谷さんは言った。それはその通りだ。まあ、僕が深谷さんでもそう言うだろう。別れたいですよと答えると、先輩はおいおいとやけに恐い顔を僕に近づけた。

「だから別れるよ。別れられない理由でもあるのか？ その、親が決めた許嫁だとか、そういう奴か？ 今どきそんなのはなんの効力もないだろ。それとも何か」

デキたかと深谷さんは右手で自分の腹の辺りを膨れたように丸くなぞった。

「デキちまったんじゃあ、こりゃ一寸マズイなあ。産むにしても産まないにしても、どっちにしてもデリケートな問題になっちまうからなあ。精神的にも経済的にも——まあ、なんと言うかなあ。その、その場合俺は経験がないから適切なアドヴァイスはできないけれども」

「勝手に話作らないでください」

「デキてないのか」

先輩は顔を引いた。

「じゃあなんだよ。結局、お前に未練があるということじゃないかよ。つまりなんだ、今の話は惚気話なのか。おいおい、お前さ、半年振りに喚び出しておいてお惚気聞かせるかよ」

ストレートに惚気ろよと先輩は僕の肩を叩く。

「俺なんかはすでに中年だが、お前はまだ二十そこそこだろうが。まあ、若者だとは言わないけどな、最近の三十はまだガキだぞ。ならなんて言うのかな、ラブラブだとか、そういう」

「そんなんじゃないんですよ」

伝わらない。

伝わりにくい。

「すんなりと判つちやもらえないことかもしれないけども——一つだけはつきりと言えることはです、僕は、もう三代子のことは好きじゃないですし、だからなんの未練もない、ということですよ。正直言つて顔も見たくありません」

「それでも別れられないのか。そこが判らないんだよ。なんだ、何か弱みでも握られてるのか？」

「弱みってなんですか」

犯罪の証拠握られてるとか返せない額の借金してるとかそういうのだよと言って、深谷さんはグラスを空けた。

僕は透かさず酒を注ぐ。お開きにされては困る。困るというか、厭だ。家に帰りたくない。

隣の卓の学生どもが、妙に煩瑣い。どうやら一人声のデカイ奴がいて、そいつの所為で全体的にトーンが上がっているのだ。声を通らないからよく聞こえない。よく聞こえないから声も大きくなる。声が大きくなればテンションも上がる。若者は単純だ。

僕の人生は犯罪とは無関係ですと言ったのだが、先輩には聞こえなかったらしく、何したんだよと言われた。

「何もしてませんよ」

「してないのかよ。三代子ちゃんつてのはアレだろ、慥か半年前に渋谷で飲んだ時、お前が連れて来た娘だろ？ あれ、可愛い娘だったじゃないか。少し地味めだったが、こう小さくて、甲斐甲斐しい感じの、佳い子に見えたけどな」

「ええ。小さくて甲斐甲斐しくて見た目地味だけど可愛い娘ですよ」

そう。

それは事実なのだ。

森田三代子はそういう娘だ。

そこだけ論うならば、彼女にするのに申し分のない女性——ということになるだろう。

「何が気に入らないんだよ」

尋かれると思った。

何をどう話すべきなのか、あれこれ言葉を反芻しているうちに、深谷さんはまあ色々あるわなと話を仕切った。

「外面と内面は違うもんだしな。相性つてのはあるからなあ。美人だから良い真面目だから良いつてもんじゃあないしな。寝相が悪いだとか、便所が長いだとか、その程度のことでも深刻な喧嘩になるんだよ。気に入らないとなると、もういちいち気になるもんだからな。慣れるもんじゃあない。歯を磨いてる間ずっと水道出しつ放しなのが我慢できなくて離婚したつて奴も居る。まあ、つまらんとでも我慢できないことはあるさ。で、坊主憎けりや袈裟まで憎い——いや、袈裟が嫌なら坊主も嫌いつてことになつちまうもんなだよ」

仕方がないよと先輩が言った途端に隣の学生が大声で笑った。

そう簡単に片づけられても困る。喧騒に合わせて、深谷さんはいいいいよと手を振った。

「そりゃまあいいけど、で、どうして別れられないんだよ。顔も見たくない程嫌いなんなら、なんとも言えるだろうよ。未練もないんだろ？ ならどうにだつてなるんじゃないのか？」

「どうにもならないですよ」

ならないのだ。

話が見えないなあと、先輩は首を傾げてから煙草を啜えた。

「吸うぞ。いいな？　じゃあ、取り敢えず尋くけどな、喧嘩したか？」

「喧嘩になりません」

「ならない？」

ライターは着火したのだが煙草に火は点けられず、深谷さんはそのままぼかんと口を開けた。煙草は卓上に落ちた。

「ならないって？」

「怒つても怒鳴つても、詰つても、殴つたつて蹴つたつて、まるで喧嘩にならないですよ」

「堪えるのか？　彼女」

「堪えてる——のかな」

いや。堪えてなどいない。堪えているのはむしろ僕の方だ。

「打つたり蹴つたり、そういう暴力行為も働いたわけか？　お前が？」

「ええ。柄になく」

「でも——殴り返して来ないのか？　為すが儘つてことか？　厭がりもしないのかよ」

「そこが難しいところだ。被虐趣味なのかと先輩は問うた。」

「喜んだりするとか」

「喜びませんよ。泣きますよ」

「泣くのか。でも抵抗はしないのか」

「抵抗はしません。だから殴っている僕の方が、もう只管悪人に見えますね。見えるという以前に、僕自身がそう思ってしまうわけです。手が痛くなって自己嫌悪に陥るだけです。いいですか、三十面下げた男が、無抵抗の女の子を蜿々殴り続けられますか？」

そりや犯罪だと言って、深谷さんは漸く煙草に火を点け、深く吸い込んで、白い煙を吐き出した。「つうか、手を上げた時点で犯罪は犯罪だからな。軽くぼかつと叩いただけであっても、それで訴えられりや暴行罪だ。あ、もしや訴えられてるのか？」

訴えられたら徹底的に戦いますよと僕は答えた。

「いや、逆に戦えるから、訴えて欲しいですよ」

よりいつそうに解らないと先輩は言った。

「で、まあお前が自己嫌悪に陥りながらも殴つたとしてだ。彼女は結局どうするんだ。泣き叫ぶだけか？」

「どうにもなりません」

殴り終われば、泣き止む。殴る前と何も変わらない。

「けろつとしちまうのか」

「けろつと、といますか——」

なんなのだろう。

痣ができる程殴つても、どうして彼女に痣があるのか判らなくなる。

殴つたのは他ならぬ僕自身なのに。

「殴つた後、彼女はなんで殴つたのか、どうして殴つたりするのか、そういうことは尋いて来ないのか？ ああ、まあ殴る前からそれは解っているわけか」

「解つてませんよ」

「だつて喧嘩——喧嘩しないのか」

「喧嘩にならないんですよ。喧嘩にならないから——というか、喧嘩したいから殴るんですよ。口喧嘩で済むならそれでいいんです。言葉ではどうにもならないので結局殴るしかなくなるんですよ、鱈の詰まり」

「殴ることないじゃないとか、暴力反対とか、そういうことも言わないのか」

「言いませんね」

「それは——やつぱり堪えてるのじゃないか？ 大昔の、なんだ、貞女の鑑とかなんとか、よく知らないが、亭主閑白という名のドメスティックバイオレンスが堂々と罷り通つていた時代、ご婦人は顔が曲がる程叩かれてもぐつと我慢して普通に振る舞つたりしてたんだろ？ いや、俺も実際にそんな女性は知らんが、古臭いお芝居なんかであるじゃないかよ」

「そういうのじゃないですよ。いいですか先輩。僕はそんな昔の芝居に出て来る放蕩亭主みたいに、ヒステリー起こして暴力振るうわけじゃないんですよ。と、いうかですね、女を殴る男なんか最低ですよ。最低だと思つてましたし、今だつて思つてます」

でも。

言葉が通じないんですよ、と言つた。

「通じないつてお前」

「僕が何を言つても、まったく、まるで通じないんですよ。彼女には」

「つたつたつて、日本語が判らないわけじゃないだろうよ。聞く耳を持たないつてことか？」

「聞きます。理解もします。でも、無視されます。いや、無視じゃないんですよね。つまり、通じてるんですけど——」

伝えにくい。

僕が口籠ると、深谷さんはむしろ興味を持つたらしく、再び顔を前に突き出してどうということだと尋いた。

「ええと——例えばですね、小さなことなんですが、僕はグリンピースが嫌いなんですよね。好き嫌いほとんどないんですけど、アレだけは駄目で」

俺も椎茸が喰えないと先輩は言つた。

「椎茸だけは駄目だな。どうしても喰えない」

「まあ、僕の場合はそこまで嫌いじゃないんです。無理すれば食べられますけど、好んで食べたくはないわけです、そのくらいの苦手は誰でもあるでしょ。で、彼女が」

「ハヤシライスを作ってくれた。」

「お約束のように、グリーンピースが載っていた。」

「彼女は料理、上手なんですよ。まるで、ファミレスやなんかのメニューの写真みたいに、実に綺麗に作るんですね」

先輩は店のメニューを開いて眺め、こんな具合なわけな、と言った。

「まあこういう居酒屋チェーンの場合は多少現物の方が見劣りするがな」

「ファミレスもそうですよ。でも彼女が作るのはそのまんま、いや写真より美味そうに見えて、実際に美味いんですよ」

いいじゃないかよと先輩は言う。

隣の学生が大笑する。

「ええ。いいですよ。で、ハヤシライスには載ってるでしょう。何粒か」

「載ってるな。俺は好きだぞ」

「僕は嫌いなんです。だから、こう除けたわけですよ。食べなかった」

「そしたら怒ったってのか？ 老舗ラーメン屋の頑固親爺みたいに、この野郎全部食べやがれ、とか？」

怒られたのなら、その方がいい。

「あ、グリーンピース嫌いなんだ——と彼女は言いました。僕は、そうなんだ、どうしても食べられないんだよと、少しばかり大袈裟に言った。それから互いの好き嫌いの話なんかを暫くして、まあその時は話も確り咬んでいて、別に怪訝しなところは何もなかったわけですよ。むしろイイ感じ。その日はそれまででした」

「普通だな」

「普通です。で、数日後彼女がまた家に来まして、この間作ったハヤシライス美味しかった——なんて尋くわけです。グリーンピースの件はともかく、味はプロ並みに美味かったわけですから、正直に美味かったと答えた。そしたらまた作ってくれて——」

上に。

「グリーンピースが載っていた。」

「忘れてたんじゃないのか？ そんな細かいこと、トッピングだろ？ いつもの癖でつい載せちまつたとか」

「まあ、僕もそう思ったんですが——明らかに量が増えてるんですよ」

「増える？」

二十個くらいに増えていた。

「で、ちよつとムツとしたんですが、また除けて、この間言つたよな、と」

まあ普通だなあその返しは、と先輩はグラスを飲み干し、注ごうとする僕の手を止めた。

「で、彼女はなんと答えた？」

「言つてたわね」

「はア？」

「言つてたわね——と答えました。憶えてるんですよ彼女。というか忘れてるわけじゃないんです。たった数日前の話ですからね。で、なら嫌いなもの知つててなんで載せるんだよと言うでしょ？ それ普通ですよね？」

「普通——だな」

「笑うんですよ。うふふ、つて」

「嫌がらせか？ それ、単なる悪戯じゃないのか」

僕もそう思つたのだ。

そう思つたから、ムツとした己を恥じて、笑つて食べた。

「まあ、その日はそれまでで」

「後があるのかよ」

「ええ。何日か後、会社から帰ると彼女がもう来ていて——あ、鍵渡してるんです。で」

「ハヤシライスか？」

「ハヤシライスなんですが——評判が良いからまた作っちゃつた、つて、まあ反応は普通なんですよ。女の子は彼氏に褒められれば続けて作っちゃつたりするでしょ。で、まあ可愛いもんだから、男は喰つちやうもんじゃやないですか」

俺はそんな料理の上手な彼女を持つたことがないからと深谷先輩は不服そうに言つて、残つていた突出しの蛸を口に放り込んだ。

「大学の時つき合つてた彼女がそりやあ料理が下手でな。お世辞で美味いと言つたカルボナーラを毎日作つてくれて大層辟易した。不味いんだよ。本人も美味しくないのは氣づいてるんだらうけど、こつちは美味いと言つちまつた手前、嘘だとも言えないからよ、まあ四食目で飽きたと言つて逃げたけどな」

それは微笑ましい逸話ですと僕は言つた。

本気でそう思つたのだ。

「三代子の場合は、反応だけは普通なんですけどね。そのハヤシライス、グリーンピース十倍増だつたんです」

「十倍増って」

「載ってて五六粒でしょう、常態。ざっと五六十ですよ」

「多いな」

「表面の約三分の二が緑色の豆でした」

「悪戯——だろ？」

「そう思うよりないでしょ。でも、そうだとしても、そこまで行くとはできないんですよ。だから」

——洒落にならないよ。

そう言ったのだ。その時僕は疲れていて、しかも空腹だったのである。かなり険のある口調だったと思う。

「なんと答えた？」

「洒落ってなんのこと」

「はア」

語尾が下っている。

先輩も呆れたのだろう。

その時。

僕はかなり肚を立てていたわけだけれど、それでもぐつと己を抑えて、滔々と説明したのだった。自分は——グリーンピースが大の苦手であること。それに就いては過去二度告げていること。悪気がないのだとしても、余り楽しい冗談ではないと思うこと。それ以前に、これでは普通に食べても美味しくないとすること。

「グリーンピース嫌いではなくたって美味くはないですよ。豆ご飯の方がマシです」

「まあ、マシだろうなあ。で、彼女はなんと答えるんだよその場合。普通大抵、どうであつても話が通じているなら、まあ謝るだろ？ 天然ボケであつたとしても意図的なボケであつたとしても、真剣に抗議されたら謝らざるを得ないと思うが」

「それが」

彼女は笑った。

グリーンピースが苦手であると言うと、それはこの間聞きましたと答え、二度も言ったよなと言うと、だから二度も聞かされましたわと答え、余り楽しい冗談じゃないだろうと言うと、冗談なんかじゃないですと答え、普通に食べても美味くないよと言うと——。

でもこの間、美味しいって言ったじゃないですか。

そう答えた。

だってこの前のと違うじゃないかと当然僕は抗議した。



彼女は同じレシピだと言った。同じなわけないだろうと言うと、同じですと言い張る。食べもしないで違うと判るんですか、などと言う。

見れば判るのだ。

「言いわけはできないだろう。見れば判ると言っただらう？ 実際に判るんだらうが」

「ええ。でも、どうやらレシピは一緒だったようで。先輩の言う通りトッピングなんですよ。豆は」

「いや、でも——それは嫌いだと言っているわけだろうが」

「そうなんです」

僕はトッピングするなどは言っていないのだった。僕は、二回とも笑いながら除けたのである。そして美味い美味いと喰ったのだ。

「そりゃ詭弁ぎべんじゃないか」

「ええ。でも、正論ですよ。だから僕はぐつと堪こらえて、謝りました。そして、次からグリーンピースは載せないでくれと頼んだ。そして大量のグリーンピースを除けて喰いました」

「謝ったのか」

一度謝るとつげ上がるぞうと、深谷さんは言った。

「偉偉そうな物言いに聞こえるが、こりゃ男女の仲だけの話じゃないぜ。なんだってそうだ。猿だつてそうだ。真理だ」

「解りますけど、僕は無駄な争いはしたくないんですよ。疲れるだけです。謝ると、彼女は何もなかったかのように普通になりましたし。でもですね」

「まだあるのか」

「その次は、グリーンピースだけが載っていました」

深谷さんは口を開けて、自ら酒をグラスに注ぎ、氷も水も入れないで一口だけ飲んだ。

「そりゃお前、完全に嫌がらせだろ」

「ええ。誰がどう考えたって嫌がらせですよ。でも、嫌がらせをされる理由がないんです。何一つ凶悪になるような要素はなかったんです。彼女ももの凄すごく機嫌が良くて、要するに、テーブルの上のグリーンピースライスだけが、なんと言うか」

狂気染しみていたわけ。

——間違っている。

それが僕のその時の真情だった。

「なんと言った？」

「なんだよこれ」

「なんと答えた？」

「ハヤシライス。好きでしょ」

おいおいおい、と深谷先輩はグラスに氷を入れて手で揺らし、それからぐいと飲んだ。

「カノジョ、狂ってる——か？」

「いや。彼女は正常です。少なくとも社会生活は普通に営んでいるし、いわゆる異常行動もない。暴力的になることもないし対応も極めて普通です」

「普通じゃないだろうよ」

「ええ。食卓の上の皿の中だけが異常なんです。この上なく異常なんです。僕はその異常さに対応できなくて」

何も言わなかった。

僕は前と同じようにグリーンピースを除けて、白米だけを食べた。そして、グリーンピース載せないでくれと言ったよねと、とても普通の口調で言ったのだった。

三代子は、うん、そう言ってたよねと同じように普通の口調で答えた。僕は皿の上に大量に残ったグリーンピースを指し示して、これはグリーンピースだろ、と言った。彼女は笑って、

——そうだよ。

と答えた。

それ、やつぱり狂ってるだろうよと言った後、先輩は大声で放送禁止用語を口にした。隣の学生にも聞こえたのか、二三人がこちらを見た。

「ええ。僕も少し怖くなった。何もかも普通なところが、却って狂気を感じさせたわけですよ。でもね、先輩。例えば、そうだ。僕のこの話が、全部妄想としたら——僕はもう、狂人に限りなく近づいているんだろうと思うわけですが、どうです？」

「まあ、そうだろうな」

「でも、先輩は今、僕を狂人だと思ってるじゃないか？ 僕が事実を語っているということを前提にして聞いている。何故です」

「何故って、だってお前は今までずっと普通に——あ、そうか」

「そうなんです。自分で言うのもなんなんですけど、取り敢えずこの場合異常なのは僕の話の中身だけです。だから先輩は僕の話を実事だと受け止めてくれていて、僕自身がオカシイとは思わなかった。僕も同じです。このグリーンピースには何か理由があるのじゃないかと、そう考えたんですよ」

日常に引き寄せたかったのだ。

結論から言うなら、引き寄せることは不可能だったのだが。

「僕が極めて平常を装っていたためその日はそれ以外何も起きませんでした。まあ僕は夕食が白米だけという、たぶんかなり珍しい体験をしたわけですがね。でも遣り過ごしてさえしまえば、まあ別にどうということとはなかった。彼女も機嫌良くて、まあ、人というものは日常に掬め捕られているようなところがあるんでしょうね。上っ面だけでも平穏だと、それでいいような気になるんですよ」

「そうだろうけどなあ」

変だろうと深谷さんは言った。

「変ですよ。変だから先輩に相談してらんです。まあね、この話は結局、白米さえなくなつて、全部グリーンピースになつちやうところまで行くわけですが」

「全部つて——」

「ええ。それ以降、我が家の食卓には月に何度かはグリーンピースが山盛りになつただけの皿が並ぶんですよ」

深谷さんは人差し指で顚顚を指し、指をぐりぐりと動かしながら、そりゃあ駄目だよと言つた。

「ええ。駄目でしようね。でも、僕はそうなつて初めて気づいたんですよ」

「何を」

「彼女の皿です。ま、夕食ですから彼女も一緒に食べるんですよけどね」

「豆の盛り合わせをか？」

「単品山盛りです。でも彼女の皿には普通にハヤシライスが盛られてたんですよ」

「そ、そうなのか？」

「それまでもそうだったんです。僕は自分の皿の上の不条理にばかり気が行つていて、彼女の皿まで見てなかつたんですよ」

お前だけ豆だったのかと深谷さんは確認する。そうだったんですと僕は答えた。

「彼女はずつと普通のハヤシライスを、しかもグリーンピースが載つてないのを食べてたんですよ」

「は？」

「彼女、グリーンピース嫌いになつたんだそうですよ。しかもその理由が」

——あなたが嫌いだっていうから。

「処置ナシだな、それ」

「ええ。でもね先輩。それはほんの一例なんです。そういうことは他にも沢山あるんですよ。いちいち挙げてられないですけどね。思い出すと不愉快になりますからね」

聞きたくないなと深谷さんは言った。

「そりゃ完全にイッてるよ。お前は正常だと言うけどな、それが正常なら俺やお前がイカレてることになる。それ、完全にコミュニケーション不全だろ。何一つ話が——」

そこで先輩は言葉を切り、ああ、と溜め息のような声を漏らした。

「それで話を通じない、つてか」

「ええ。通じません。日本語はちゃんと通じますし、意味も理解してくれる。でも、通じてないでしょう。悪気もないし危害を加えるわけでもないし実害は——まあ事件性のあるようなものはない。でも、至るところで齟齬だらけです。ズレまくりなんですよ」

「ズレてるというレヴエルじゃねえよ」

先輩の顔はもう化け物でも見たような表情になっている。

「それじゃあ、まあ——喧嘩にもならないわけだわなあ」

「ええ。喧嘩にはなりません。大体、彼女の方は僕に対してなんの不満も持っていないんですね。僕の方は、まあ不満というより恐怖に近い感情を恒常的に抱いているわけですから。これは、もう常に一方的なものなわけですよ。僕が一方的に彼女を攻撃するようなことになる。で、彼女は泣いたり謝ったりする。でも、いくら泣いたって謝ったって、何も何一つ——」

変わる。言えと言っただけ、責めれば責めただけ、悪くなる。酷くなる。狂気が——濃くなる。

「僕も聖人君子じゃないですからね。我慢にも限界がある。終いには暴力ということになります。でも」

「まあな。事情はともかく、暴力を振るっているという局面に限れば、お前が一方的に女を苛めていくような——感じになつちまうわけだな。あんな、郡山。悪いことは言わん。お前、一刻も早くその女とは別れた方がよいぞ。それ——間違ひなくサイコさんだぞ」

「ですから」  
別れられないのだ。

ii

三代子と出会ったのは一年半くらい前のことだ。

あれは、夏のことだった。

僕は、酔っていた。

余り酒は強くない。特にワインはいけない。なんだか妙な具合に効く。接待をしているのだから、さかされては飲まない。中途半端な飲み会でワイン好きの取引先課長に安いグラスワインを三杯と少し飲まされて、僕は酔っていた。

へべれけ、というわけではなかった。

その時の記憶もちゃんとある。今でも憶えているのだから、ちゃんとあったのだ。足取りだっただけで確乎か——と思う。もちろん、理性的であつたはずである。

ただ、気分が悪かつたので、いや、悪くなるような予感がしたので、僕は偉い人達をタクシーに乗せ、そんなに偉くない連中を駅まで見送つた後、独りで少し離れた私鉄の駅まで歩いた。

藪蚊が大量に飛び交っていた。

ガード横の、公園のような遊歩道のような路を、僕は下を向いて歩いた。

どちらかといえば薄汚れていて、決して綺麗な場所ではないのだが、途切れ途切れに敷かれている  
タイルと定期的に現われる街燈だけはやけに立派で、街燈の根元にはベンチが設えられていた。

午後十一時半を回ったくらいにの時間だったろうか。終電には間に合うつもりで歩いていたのだから、そのくらいだっただろう。

駅まであと五分というくらいの地点だったと思う。

いくつめかのベンチに、蚊の集った街燈の、なんだか不健康に瞬く光に照らされて、三代子が泣いていた。

たぶん、泣いていた。

少し離れたところに男が立っていた。

金髪にキヤップ、迷彩パンツの若い男だった。二十代前半だろう。剥き出しの肩にはタトゥーが施してあった。簡単な凶形だったことは間違いない。色も大きさもはつきり憶えている。それなのに、何故か何が彫られていたのかは思い出せない。

否、もしかしたら貼りつけるタイプのヤツだったのかもしれないのだけれど、僕は残念ながらそういうものに縁がないので見分けなんかつかなかった。

男は、震えていた。

興奮しているようだった。

一方、三代子は下を向いて、しゃくり上げていた。掌を顔に当てていたかもしれない。啜り泣きのような声は聞こえていた。

咄嗟に、ああ修羅場に行き合わせちゃったな———と思った。

気拙い。見ない振りをして足早に駆け抜けるのが一番だ。そう判断して歩行速度を速めたのだが。

僕は、やつぱり酔っていた。

少し蹠跟けた。それで、僕は項垂れた三代子が座っているベンチの真横に躍り出てしまった。

最高に拙い———と思った。

僕が失ったバランスを立て直した時、男の声がした。

死んじまえよ。

男はそう言った。声が震えていた。

痴話喧嘩に違いない。女は泣いている。

どちらかが別れ話を切り出して、それが拗れている、まさにその場面なのだ。僕は丁度張り詰めた緊張の糸が切れた瞬間に、頃合い悪く乱入してしまったのだらう。いや、僕が蹠跟けたことが不穏な拮抗を崩す端緒となったのかもしれないなかった。

女は何も言わずに泣いていた。

男は、さらに怒鳴った。

もう沢山だ。

我慢できねえよ。

この馬鹿女、早く死ねよ。

女が振られたのだ。そう思った。振られたと言うより棄てられたのか。僕はそこで漸く地べた付近を上下していた視線を上げて、三代子の顔を見たのだ。

可愛い顔だった。

そう見えた。

それは錯覚などではなくて、三代子は実際に可愛いのである。とびきりの美人ではないかもしれないが、小作りであどけなげの残る端正な顔立ちは、可愛いと形容するよりないだろう。泣いても、笑っても可愛い。そういう造作なのだ。

男の顔は暗くてよく見えなかった。

僕は、まあ腰抜けの部類なので、相当に狼狽した。狼狽しただけではなく、次の瞬間吃驚したのだ。つた。

風を切る音がして、それからカツンという大きな音が響いた。

男が、石を投げたのだ。

男はすぐに屈んで石を拾うと、もう一度投げた。今度は三代子の肩に当たった。

三代子は肩を押さえて、ひいと声を上げて前屈みになった。こうなると、流石に腰抜けの僕も黙ってはいけないと――。

思ってしまった。

酔っていたのだ。

君、何をするんだッ。

僕はそんなことを言ったと思う。真に芸のない綺麗ごとの警告である。男は、オッサン邪魔すんなよ的なことを言った。まあ当時僕はまだ二十代だったのだから、男とそんなに年齢差はなかったはずなのだが、彼らから見ればネクタイを締めたサラリーマンは皆オッサンなのかもしれないから、それは仕方があるまい。

石なんか投げて、怪我をするだろう。

そう言ったはずだ。当たり前過ぎる。笑える程に芸がない。

男はハアッと小馬鹿にするような声を上げて、それから僕を、まるで値踏みでもするかのように見た。男の顔は街路樹か何かの影が掛かって相変わらず確認できなかったのだけれど、視線だけは確乎り感じた。

男はもう一度、罵るような蔑むような声を上げてから踵を返し、何やら捨て台詞のような言葉を吐き散らして、そのまま駆け去ってしまったのだ。

なんと言ったのかは聞き取れなかった。

もしかしたら聞き取れていたのかもしれないのだけれど、忘れてしまった。思い出せない。

男の聲が聞こえなくなり――。

呆然と立ち竦む僕と、蹲った三代子だけが残った。

そのまま立ち去る――それがたぶん、僕の平素のスタイルだ。

面倒なことに関わるのはご免だ。誰がどうなろうと関係ない。できることはするけれどそれ以上のことはしない。僕はそういう人間だ。前は向いているけれど、真正面は向いていない。

この場合、僕は一応注意を促す行動を起こしたわけだし、その結果男の野蛮な行為は止んだのだから、それで幕である。

それなのに。

大丈夫ですか。

僕は、彼女に声を掛けた。

彼女は、痛いですと答えたと思う。痛いなら病院に行った方がいいですよ、僕はまたまた間の抜けたことを言った。

彼女の反応は酷く鈍かった。僕は結構長く突っ立っていた。やがて彼女の右半分が明滅し始め、そして僕は、終電が横を通過して行くのを確認したのであった。

成り行きである。

僕は、彼女を伴って駅まで行った。

どうやら方角が同じようだったから、一緒にタクシーに乗った。

下心はなかった。

いや――後に僕と三代子は交際することになるわけだけれども、その時は神懸けて妙な気持ちにはなかったのだ。難儀を救ってやったことを恩に着せようとか、恋人に棄てられた女性の傷心につけ込もうとか、そんなつもりは毛頭なかったのだった。

僕は、ほんの少しだけ良い行いをした気になっていて、ほんの少しだけ立派な人間になったような気がしていて、それはもちろん錯覚なのだけれど、その錯覚に気を良くして、一寸だけ浮かれていただけなのである。

酔っていたのだ。

三代子は何度も何度も礼を言った。

その時、果たして僕がどんな顔をしていたのか、それに就いては記憶がない。満面に笑みを浮かべていたのか、洗面を作って恰好つけていたのか、どちらを想像しても間抜けだと思う。

そして僕は、何故か車中で彼女に名刺を渡したのだ。  
乞われたのか押しつけたのか、いずれそれがすべての始まりだった。



マンションの前で彼女を降ろし、僕はご機嫌で自宅に戻った。戻って、寝た。それで終わりのはずだった。名前も聞かなかつたのだから、そのつもりだったと思う。

翌朝、もう僕は大方のことを済んだこととしてしまい、出社と共に全部忘れた。彼女から連絡が来たのは一週間後だったと思う。

もちろん、渡した名刺の住所は会社なのであるから、会社に電話が掛かって来たのだ。

一度お礼を言いたいと、彼女——三代子は言った。

そして、僕達の交際が始まった。

最初は月に一度逢う程度だった。

それが月に二度になり、三度になり、やがて毎週デートをするようになって、僕は凡そ一年程の時間を掛けて、まあ世間で謂うところの恋人同士という奴になった。

三代子は可愛かった。容姿だけではなく仕種も、声も、話し方も、そして性格も。

そう——思っていた。

いや、それは今でもそうなのだ。彼女は基本的に出会った時から何も変わっていないのだと思う。

深谷先輩に三代子を紹介したのは丁度その頃、僕達が——いや、僕が一番幸せだった頃のことである。申し分のない彼女だと思った。いや思っていた。もしかしたら今も思っているのかもしれない。

だから——。

だからこんなに辛いのだ。

それなら、その辛さこそが未練なのだろうか。

——いや。

それは違う。

辛いのは、その頃の幸福感が、楽しい思い出が、全部偽物であったと知ってしまったから——に他ならない。

僕は、三代子が怖い。

一緒にいるのが厭だ。

いや、三代子という存在が厭だ。

今は本当に厭だ。厭で厭で堪らない。居ても立つてもらえない程に厭だ。そういう意味では、イカれてしまったのは僕なのかもしれない。僕の小市民的な神経は、彼女との遣り取りで、もうすっかりズタズタになってしまったのだ。

でも、たぶん、彼女の方は何も変わっていない。三代子にとって、僕は優しい彼氏なのである。三代子は今でも、半年前同様に幸せなのだろう。僕がどんなに酷い仕打ちをしようと、罵ろうと詰ろうと殴ろうと蹴ろうと、僕は三代子の——優しい彼氏なのだ。

何かが狂ってしまった。



三代子が狂ったという感触はない。彼女は最初からずっと変わらないし、今も僕を好きだと言う。でも僕はもう三代子が好きじゃない。

厭だ。

果てしなく厭だ。

厭になつてしまった。

最初は、歯ブラシだった。

僕は潔癖性ではないのだが、わりかしキッチンとしての方ではある。自分の歯ブラシを他人に使われるのは、厭だ。

彼女が最初に家に泊まった時、たぶんそういう話をした。彼女も同じだと言った。他人の歯ブラシを使う人の気持ちが出来ないと、彼女はそう言った。どんなに好きな相手でもそれは不潔な気がする、彼女自身がそう言ったのだ。

間違いなく言った。聞き間違いや思い違いではない。何故なら。

キスは平気なのにオカシイよね。

そう言つて——彼女は僕にキスをしたからだ。その口調も声音も、僕は明瞭に覚えている。彼女の顔の表情も、口紅の色も、そして甘つたるい感じの柔らかい唇の感触も、何もかも、すべてを脳内で再現できる程に、憶えている。

別にそれが初めてのキスというわけではなかったのだけれど、僕に取つては相当インパクトのある接触だったのだ。

その後、僕は自分のベッドで初めて彼女を抱いた。そのまま幸せに眠つて。

目覚めた時。

彼女は、僕の歯ブラシを咥えていた。

まあ、最初は気づかなかつたわけだが。

気づいた後も、うっかり間違えたのだらうと思つた。そうでなくては、なんだか筋が通らないからだ。

些細なことなのだし、目くじらを立てる程のことでもない、そう考えて何も言わなかつた。

でも、彼女は泊まる度に僕の歯ブラシを使った。ちゃんと自分の歯ブラシを持つて来ているというのに、である。

わざとやっているのか——。

これは愛情表現なのかと、僕は考えた。

僕が鈍いだけで、これは彼女からのメッセージなのかもしれない、僕は考えた。

どんなに好きな相手でも不潔な気がすると言つていた彼女なのである。つまり、この行為が僕がそれ以上の存在だという彼女なりの意思表示なのではないか。

そこで。

僕はわざと、彼女の歯ブラシで歯を磨こうとした。

お返しをしなければいけないのではないかと、そう思ったのである。しかし。

信じられない——と彼女は言った。

怒ったわけではないようだった。どちらかというと呆れたような口調だった。あんなに不潔だから厭だつて言つてたのに、嘘だつたんですか、と言われた。

そして、彼女は。

ご免なさい、あなたのこと好きだけど。

私やつぱりこれは我慢できないの。

そう言つて——。

僕が使つた歯ブラシをごみ箱に棄てた。

僕は相当に混乱した。混乱し過ぎて、まともな対応ができなかった。できなかったから、遣り過ぎをした。

そうした細かい行き違い——そう、最初は行き違いだと思つていた——は、次々と起こり、ぎすぎすした澱おちのような厭な感情は、日に日に増大した。

例えば、こんなことがあつた。

ある日、トイレに入ると、手拭てふきタオルが床に落ちていた。僕は落とした覚えがないから、彼女に尋いた。三代子は、もしかしたら自分が落としたかも、と言つた。

落としたのなら拾いなさいよ、と僕はとても普通に言つた。トイレの床は不潔なのだから、まあ落としたなら洗濯するがいいだろう。そうでなくても、せめて元に戻しておこうよと、それは別段おかしな主張でも無理な相談でもないだろう。

彼女もそうねご免ねと言つた。

汚いもんね、気がつかなくてご免なさいと、三代子は素直に謝つた。

普通は、それで終わりだ。でも。

その日を境にして、彼女が家にいる時は必ず、トイレのタオルは床に落とされるようになった。必ず、落ちてくる。戻しても新しいのを掛けても、必ず——。

落ちてくる。

僕は、もう何も言わなかつた。拾うのも止めた。落ちたタオルを床に放つたまま新しいタオルを掛けて、その二枚目も落とされたのを見た時——。

ああ、もう駄目だなあと思つた。

どうかしている。何かから何まで、どうかしている。どうかしてないのは、彼女自身だけだ。三代子  
本人は、何も変わらない。

相変わらず顔つきも仕種も可愛らしいし素直で健気だ。

そこが――。

いつそうに狂気染みているのだ。

あつちもこつちも、何もかも、全部歪んでしまっている。僕の生活は、三代子のお蔭でぐにやぐに  
やに撓んでしまった。

そして、僕はさらに気づいた。

そう。

身の回りに、僕の厭なことが堆積しているのだ。靴が揃っていない。テレビが点けつ放しだ。生ゴ  
ミがゴミ箱に棄てられている。陽が暮れているのにカーテンが半分開いている。トイレのタオルは床  
に落ちている。風呂の蓋が湯船に浸かっている。シャワーが完全に止まっていない。コーヒーカープ  
がそこここに置いてある。洗濯前の衣類と洗濯した後の衣類が一緒に籠に入っている。新聞の束が分  
散している。

一つ一つはどうでもいいことだ。

我慢できないことじゃない。

そういう環境こそ居心地が良いのだという人も沢山いることだろう。それは、それで良い。それを  
良しと感じる人を責める気はない。

どれだけだらしがなく暮らしても死にはしない。どんなに清潔を装っても、実際の雑菌の量は、そ  
う違わないのかもしれないと思う。滅菌室じゃないのだし。

適当にしていた方が楽だ過ごし易いというならば、それはそれで有りだろう。

縦んばそういう主義の人と同居することになったというのであれば、僕だって考える。譲るところ  
は譲るだろうし、逆に通すべきところは通すだろう。

妥協点なんかいくらだってある。

我慢だってできるだろうし、感化されることだってあるだろう。まるで気にしなくなるかもしれない  
い。そもそも、大したことではないのだから。

僕はそれ程強い信念を以て生活しているわけではないのだし、同時に僕はまったく融通の利かない  
頑固者でもないのである。

僕はむしろ、場当たり的に人生を遣り過ごしてばかりいる、小心者なのである。

でも。

でもだ。

彼女は、森田三代子は。

平素、たぶん僕なんかよりずっと神経質で綺麗好きで、デリケートなのである。  
つまり。

無神経で不潔でだらしのないのは——。  
僕なのだ。

もちろん、僕がそうしているわけではないのだけれど、こうなるのは——。  
僕の暮らしにくい環境が僕をぐるりと取り囲んでしまうのは、僕が厭うモノゴトが僕の周りを埋め  
尽くすのは、それは、僕が厭がるからなのだ。  
そう考えるよりない。

彼女は、三代子は、僕が厭だと言うことをするのだ。気にしていないことに就いては何もしない。  
僕が厭だ厭だ止める止めろと言うから——。

彼女はするのだ。

彼女の意志は解らない。悪意があるとは思えない。でも、そうなのだ。無意識なのかどうなのか、  
そこもまったく理解不能なのだが、三代子は僕が厭がることをするのだ。

そう気づいた後——。

試しに、僕は心にもないことを言ってみたことがある。

新聞はあちこちに散ってた方がいいよな——。

そう言ってみただ。

何かきちんと束ねられていると息が詰まるよな、と。

そんなこと、まったく思っていないかった。広告を抜いて、きちんと四つ折りにして、日付け順に重  
ねて紐で縛っておく方が良いに決まっている。

でも、逆を言えば。

もしかしたら。

そう考えたのだった。

ところが、その意見は一蹴されてしまったのだった。三代子は、それは有り得ないわよ、と言った  
のだ。

新聞みたいに広がるものがあちこちにあつたら片づかないし、古紙回収の時にもすぐに出せないじ  
やない——。

そう。

そうなのだけれど。

結局、僕の家の新聞はチラシやなんかと交ぜられて、テレビの下やらベッドの下やら、そっちこつ  
ちに散乱している。

どういうわけか、彼女には通じないらしかった。

日常に寄つた細かい皺しわは、あつという間に増え、僕の毎日はそれは見事に屈折してしまつた。肥大したストレスは健康も害し始めたし、それは仕事にも支障きたを来し始めた。

僕はもう、彼女が、森田三代子が、厭で厭で厭で厭で厭で厭で仕様がなくなつてしまつたのだつた。

そして。

僕は大きいなる失敗をしたのだ。

彼女に――。

君が何より厭だと告白してしまつたのである。

頼むから、もう来ないでくれと。

そうなのだ。

彼女は――。

僕が厭だと思ふことをしてしまふ――のである。僕は、そのところを完全に失念していたのだ。

翌日から――。

彼女は、僕の家に住み始めた。帰らなくなつた、と言うべきだろうか。

もちろん、彼女にしてみれば好きだから、と言うことになる。こちらもしきなのであれば、拒む理由はない。要するに同棲という奴だ。三代子は、そのつもりのようなだつた。

僕はもちろん拒んだ。

厭だ、と言つた。

言つても言つても、言えども言えども、いや、言えば言う程――。

僕は、本当に気が狂いそうになつた。

それでも、まだその頃は――二月ふたつきくらい前のことになるだろうか――僕も、まだ微かな希望めいた感情を持つていたのだ。

先輩の言う未練である。それが未練という言葉で表現できる感情なのかどうかは甚だ怪しいのだが、その頃の僕はまだそれっぽい気持ちを持つていた。

僕が厭だと思ひさえしなければ。

彼女は、とても素敵な彼女なのだろう。

但し僕が厭だと思ひさえしなければ――である。可愛いし、小柄だけれどスタイルもいいし、控え目だし、料理も上手だし、几帳面きちょうめんで、どうやら頭も良い。

三代子は人材派遣会社に登録しているのだが、資格も色々持つていて、その上どんな仕事もそつなく熟こなずらしく、結構収入も多いのである。人当たりも良いし、甘えるし、経済観念も確じつ乎か持つているから余計なお金もかからないし、それでいて少し抜けていて、不平不満はほとんど言わないし、何よりも一途いっすに僕を好いてくれているし――もう、文句のつけようがない。

ないはずだ。

僕が厭だと思さえしなければ、森田三代子は、彼女として満点だ。でも。今のままでは、満点どころかマイナスなのだ。この関係を修復することができれば——それは偏ひとえに僕が彼女を好きになることができれば、という意味なのだが——僕は、きつとたぶん誰よりも幸せになれるのじゃないか。

それが、僕の未練だった。

努力した。

努力はまったく報むかわれなかった。

厭なもの、厭むなのだ。

と、言うか——厭むなもの、厭むなことは次々に増えた。なんであれ、厭だと思ふことは僕の前に現われ、厭むでなくなると、止やんだ。

厭むなものだらけだ。

厭むなことだらけだ。

決定的な事件が起きたのは、先月の終わり頃だった。

僕は、ずっと熱帯魚を飼育していた。熱帯魚と言ってもそれ程高価なものではない。ネオンタキシードやレッドテールタキシードなどのいわゆるグッピーである。もうかなり長く飼っている。彼女は偶たまに見蕩みよれていた。

グッピーに見蕩みよれている時の三代子は、まあ実に可愛らしい彼女だったから、僕は彼女が魚に心を奪さらわれている時だけは——平穩な気分になれたのだった。

綺麗ねと言うから、綺麗だろと答えた。

ずっと飼かっている情が移ると、僕達は珍しく普通の会話をした。まあ手が掛かるし、世話は面倒めんどうなだけけど、こんな魚でも——。

死ねば可哀想だから。

生き物が死んじやうのは悲しいよね。

ああ、悲しいね。ペットは——。

そこが厭むだよね。

その翌日。

魚は全部死んだ。

僕は、切れた。

当たり前だろう。魚と雖いえども生き物である。三代子は、僕に嫌がらせをするために生き物の命を奪さらったのだ。殺ころしたのである。それは、たとえどんな理由があっても許ゆるされないことだろう。

出て行けと言った。彼女は謝あやまった。泣ないて謝あやまった。でも、僕は許ゆるさなかった。僕は僕らしからぬ剣幕で怒鳴り散らし、三代子を家から追い出した。

三代子の持ち物も何もかも玄関から放り出した。目茶苦茶に投げつけた。二度と帰って来るなど僕は叫んだ。

叩き出して、鍵を掛けてドアチェーンも掛けて、僕は——せいせいした。魚が死んだ悲しみよりも、魚を殺された怒りよりも、彼女から解放された清々しさの方が勝っていた。

あれだけ罵倒して、あれだけきつぱりと別れを宣告して、力づくで家から追い出したのだ。酷い別れようだが、仕方がない。

並みの神経なら、もう戻っては来ないだろうと思った。

僕は死んだ魚を処分して、部屋を綺麗に掃除して、整頓して、家中から彼女の痕跡を綺麗さっぱり消して、僕はその日、久し振りにゆつくりと眠った。

翌日。

会社から戻ると。

三代子が居た。それまで通り、まるで何もなかったかのように、彼女は居た。

三代子は——。

おかえりなさい。

と、言った。

それだけではない。

新聞が散らされていた。カーテンは開いていた。タオルは落ちていた。靴は散乱していた。洗濯物は塊かたまりになっていて、水道の水は出っ放しばなだった。テーブルには山盛りのグリーンピースが盛られた皿が置かれていた。

そして。

綺麗にしたはずの水槽は、死んだ魚で満たされていた。

僕はその日、初めて彼女を殴った。

何度も、何度も殴った。

こんなの、嫌がらせの域を超えている。

お前なんかキライだ、大嫌いだ、顔を見ただけで吐き気がする、出て行け、死んでしまえ、もう二度と顔も見たくない——。

人をぶつたのは初めてだった。

もの凄く拳こぶしが痛かった。自分が鬼にでもなったかのような気になって、涙がだくだく出た。三代子はひいひい言って泣いた。泣いて謝った。ご免なさいご免なさい、許して許して。

許すものか。

許して堪るか。

こいつは、わざわざ熱帯魚を買って来て殺して水槽に入れたんだ。そんなこと。

そんなことする奴は――。

本気で、死んでしまえと思った。

三代子の可愛らしい鼻から真つ赤な鼻血が噴き出し、円らな眼はどす黒い痣で隈取られた。頬が紫色に腫れ上がって、唇の端が切れた。痛いようご免なさい、許してください、勘弁してください。

勘弁などできるか。

僕は、三代子を玄関から蹴り出した。

それから、何かその辺にあつた物をいくつか投げつけて、それからドアを思い切り閉めた。

心臓が口から飛び出るかと思う程高鳴った。僕はただ興奮し、ミニコンポをぶつけて水槽を叩き割り、部屋中を水浸しにした。床に死んだ魚が散乱した。

二時間以上僕は死んだ魚に囲まれて放心していた。やがて僕は、徐々に人間の感情を取り戻した。そして、僕は怖くなった。

もしかしたら――。

彼女は、あのまま死んでしまうかもしれない。

そういう、当たり前で常識的な判断力を僕が取り戻したのは、三代子を追い出してから三時間以上の後のことである。僕はドアの外を見ることができなかった。本当に怖かった。

深夜を過ぎて、僕はドアを開けた。

血痕だけは残っていたが、彼女の姿はなかった。

僕は翌日、翌々日と会社を休んだ。一日目は廃人のようになっていた。起き上がることができなかったのだ。二日目はなんとか起き上がり、部屋を片づけた。三代子に電話してみようかとも思ったが、止めた。

三日目の午後、僕は出社した。右手首が酷く痛んだので医者に寄って診断書もらった。捻挫だと言われた。階段から落ちたのだと上司に嘘を吐き、その日は大して働かずに帰宅した。帰ると。

三代子が――居た。

三代子は痣だらけで腕を吊っていた。額と口許には絆創膏が貼られていた。彼女はそんな痛々しい姿で、僕を見て、

「おかえりなさい、と言った。」

何も変わらなかった。

三代子は、本当にご免なさい、私、あなたの気に入らないことをしてしまつたんですねと言つて謝つた。もう二度としません気をつけます、私はあなたが大好きなんです、愛しているんです、あなたがいないと駄目なんですと言つた。でも。

新しい水槽には死んだ魚が満ちていた。



遅かったのね、と三代子は言った。

「先輩と飲んでいたんだよ。ほら、半年前に紹介したことがあるだろ。僕の大学の先輩。憶えていないか」

「ええと——深谷さんだっけ」

そうだよと、僕は実に普通に答えた。

まるで普通だ。夫婦の会話のようだ。

でも。

これは。まやかしだ。

水槽の魚はすでに腐臭を放っている。家中が異臭で満ちているのだ。堪えられない程の臭気である。でも、僕は何も言えない。

酷い臭いねと、三代子の方が先に言うからだ。そして、お魚が死んじゃって可哀想よと、僕に言うからだ。慥かに深谷さんの言う通り、もうこの女は狂ってしまったているのかもしれない。

僕はこの一箇月間、何度も別れてくれと頼んだ。出て行ってくれと懇願した。

時に激昂して、殴った。

でも、どうにもならなかった。

三代子はずつと、この家に居る。

この家はどう、僕の家じゃない。僕の嫌いなことと僕が厭うもので充ち満ちた、僕の神経を逆なでし、僕を虐待するだけの、地獄でしかない。

深谷先輩は、結局かなり真剣に僕の話聞いてくれた。先輩はこの異常な事態をほぼ正確に把握し、僕の置かれている状況を理解してくれたようだった。どうも最近ご自身の身の回りで厭なことが続いているらしく、これも人ごとではないと言って相談に乗ってくれたのだった。

難しい話ではあった。  
まず。

この場合は刑事事件にも民事事件にもならないだろうと先輩は言った。

警察や裁判所はもちろん、弁護士にも相談できない。それはそうだろう。

三代子は——何もしていない。

いや、実際には魚を殺しているわけけれども、それを罪に問うことは難しい。

三代子は誤って魚を殺してしまい、代わりに別な魚を買って来て、また誤って殺してしまった。それだけなのだ。

厳密に言えば器物損壊か何かで訴えることはできるのだろう。

だが、同棲相手が熱帯魚の世話を仕損じて殺してしまつたからといって、いちいち警察に訴えるような者は居るまい。

居たとしたら――。

訴えた方がやや異常だと見做され兼ねないと思う。赤の他人が住居に不法侵入して魚を殺したのではないのだ。この女は――。

合鍵を持った、僕の。

彼女なのだ。

その他の行為も、嫌がらせであることは明白ではあるのだが、例えばストーカー的に解釈することなども難しいだろう。ストーカー規制法や迷惑防止条例にも引掛からないだろう。三代子が僕と無関係の赤の他人であつたなら、そうした道もあつたのかもしれないが、でもこの女は――。

彼女なのだ。

ただ、三代子は彼女ではあるが、妻ではない。僕は婚姻関係を結んではないのだ。これで三代子が妻だつたなら、家庭裁判所に提訴することもできたかもしれない。だが結婚していないのだから離婚もできない。

司直が関与するような隙間は何処にもないのである。

それに。

警察沙汰にした場合、圧倒的に僕が不利なのである。僕は、彼女から暴行傷害罪に問われても仕方がないことをしている。しかも、何度もしている。

これは――たとえ相手が彼女だろうが親だろうが罪状に変わりはないのだ。殴れば暴行罪だし、怪我をさせれば傷害罪である。

殺意が立証されれば、殺人未遂だ。

殺意は、あつたのだし。

深谷先輩の出した結論は二つだった。

一つは。

僕が逃げ出すことである。

何もかも捨てて、職も財産も抛つて何処かに身を隠すこと――。

慥かにそれは有効だろう。出勤し、そのまま姿を晦ましてしまえば良いのだ。

当座の生活資金ならある。無趣味で朴念仁の僕はそれなりに貯金をしているのである。一年くらいは保つだろう。

だが。

この家はどうする。

この家は小さいが親父から譲り受けた持ち家だ。土地も家屋も僕の財産なのだ。いや、そんなものは惜しくない。捨ててしまえば良い。だが。

家を放棄したとして。仕事はどうする。

三代子に行き先を知られないようにするためには——例えば住民票を移すことさえ危険な気が僕にはするのだ。

この女は、怖い。

その場合、三代子は自分を捨てた僕を恨んで追いかけて来るのではないのだ。きっと、僕のことを好きで——愛しているから追つて来るのだと思う。それはもしかしたら、何より怖い。

愛とは、即ち執念である。

そんな夜逃げ状態でまともな就職は叶うまい。アルバイトだつて難しいだろう。そもそも僕は、そんなに若くないのだ。この不景気の就職難に、住民票も移せないような身分の人間を気安く雇つてくれるところなどないだろう。

僕は、エリートでこそないけれど、それなりに将来を嘱望しよくぼうされている技術職だ。それを——。

この女のために全部捨てるのか。

こんな、厭な女のために、僕は人生の大半を捨てなければならないのか。

僕は台所で料理をしている三代子の後ろ姿を見た。

地味だが、服装のセンスは悪くない。エプロンも、一見なんの変哲もないエプロンのだが、もしかしたらブランド品なのかもしれない。下着だとか財布だとか、余り目立たないところにお金を掛ける女なのだ。

風景だけは新婚家庭のようである。

でも、たぶん三代子は今、グリーンピースの缶詰を開けているのだ。そして、どことなく荒んだ家の中には、今も死んだ魚の腐臭が充ち満ちているのだ。

厭だ。

厭だ厭だ。

——こんな女のために。

三代子は振り向いた。

にこりと笑う。本当に、風景だけは新婚家庭のようだ。

「今日ね、ハヤシライスにするわ」

三代子は明るい声でそう言った。

「憶えてる？ あなたが初めて褒めてくれたお料理よ」  
憶えてるさ。

お前、昨日もそう言ったじゃないか。  
そして、皿に山盛りになったグリーンピースを出したのだろ。昨日も、おととい昨日も。  
お前なんか。

お前なんか。

深谷先輩が出したもう一つの結論。

——その女。

殺すしかないよ。

そう、もちろん先輩は本気じゃなかった。

でも、それが一番安心だろう。

話も通じない。

暴力も通じない。

追い出しても叩き出しても戻って来る。

そして同じことを繰り返す。

何度でも、何度でも。

ただ僕を苦しめるために、僕が嫌がることを、僕が厭う行為を、ただそれだけを繰り返す。  
理屈も通じない。

頼んでも、威おびしても、何も聞き入れられない。そんな怖い女は。そんな。

厭な彼女は。

——殺すのが一番だよ。

さあできたわよと三代子は言った。

できたのか。

「グリーンピースだろ」

僕はそう言った。

「違うわよ。ハヤシライスよ。大体、あなた、グリーンピース嫌いだって言ってたじゃないですか。食べられないから、載せないでくれて」

「ああ。言ったよ。でもな、お前が盆に載せてるそれはな、誰が見たってグリーンピースなんだよ。食イスすらないだろうよ。見えないか？ グリーンピースしか載ってないんだよ。見ろよ。台所に空き缶があるじゃないか。お前が開けたんだろ」

三代子の顔が歪んだ。

「私——また、あなたの気に障さわることをしてしまったのでしうか」

「ああ。お前はおかしいからな。気が違ちがってるんじゃないのか」

「酷ひどい」

「酷くねえよ。酷いのはお前だろうが。なんだよ。なんなんだよ。どうして水道きちんと止めないんだよ。なんでカーテン閉めないんだよ。どうして新聞散らかすんだよ」

「それは、あなたが」

お前がしてるんだよ全部と、僕は喉が張り裂ける程の大声で叫んだ。

「ぼ、僕の厭がることとしてそんなに愉しいか。え？ 便所のタオル床に落として嬉しいのかお前。どうなんだよ。おかしいんじゃないのか？ わざわざ水槽買って来て殺した魚入れて、腐らせて楽しいか。臭いんだよ。気が違うくらい臭いんだよ。どうにかしろよこら。この」

馬鹿女、と僕は怒鳴った。

自分が喋る言葉とは思えなかった。こんな汚い言葉を吐き散らしたことはない。

三代子は、とても悲しそうな顔になった。

そういう顔をして、可愛い。

痣ができていても、唇が切れていても、切なそうな顔は可愛い。

そこが――。

そこが気に入らないんだよと、僕は椅子を蹴って立ち上がった。そして足早に彼女に近づいて、その小さな頬をぶつた。

彼女はひい、と言った。

僕は盆の上の、不味そうな豆の載った皿を盆ごと叩き落とした。皿は割れて、キッチンにグリーンピースが撒き散らされた。

もの凄く大きな音がした。

僕は盆を拾い上げて、彼女を思い切り叩いた。幾度も幾度も叩いた。

止めてください止めてください。

止めないよ。お前、止めてくれといくら頼んだって止めないじゃないかよ。止めるということばかりするじゃないかよ。

「死ねよ。死んでしまえよ」

僕は、きつともう狂っている。

プラスチックの盆は割れて、持ち手が取れた。僕の手にも血が滲んだ。僕は持ち手を放り投げて、彼女の、厭な彼女の細くて白い頸に手を掛けた。

死ねよ死ねよ死んじまえよ。

殺すしか殺すしか殺すしかない。

死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね。

ぎゅうぎゅうと絞めた。頸は面白い程に細くなった。彼女の顔が膨れて、眼が充血した。半開きの小さな唇からは泡が出て来た。そして、骨の碎ける音がした。

目覚めると、僕は病院にいた。枕元には深谷さんが座っていた。

深谷さんは悲しそうな目で僕を見て、大丈夫か郡山と、低い声で言った。

「先輩。すいません。やつちやいけない方を選択してしまいました。でも、僕は、どうしても我慢できなかつたんですよ」

「やつちやいけないこと？」

「ええ、僕は彼女を——」

この手で。

まだ掌には微かに感触が残っている。

あの、細くてしなやかな頸の。

そして、その芯の方で。

砕けた骨の。

「おい」

落ち着けよと深谷さんは言う。

落ち着いてますと答えた。それは本当だ。

「まあ——あんなことをしてしまつたんですから、少なからず錯乱していたんでしようけど、今はもう落ち着いてますよ。どんな理由であつても、してはいけないことをしたんですから、罪は償うつもりです。で、警察は何処です？」

警察なんかいないよと先輩は困つたように言った。

「おい。郡山。お前、何したつて？」

「ですから、殺したんです」

「何を？ また魚か？」

「変なこと言わないでください。こんな時に」

こんな時つて——と深谷さんは困惑の表情を見せた。

「どんな時だ。まあ、お前が色々と大変だったことは解るが」

「色々と大変つて——」

まさか。

彼女は死ななかつたのか。

いいや——そんなはずはない。

あんなに絞めたのに。

いいや、頸椎を潰してやったのに。

「ぼ、僕は彼女を殺してしまつたんですよ。お盆で殴つて、それから頸を絞めました。頸の骨が折れるような感触があつたし、あれだけ強く、長く絞めれば間違いなく——」

物騒だなあと深谷さんは言つた。

「誰を殺したつて？」

「ですから三代子です。森田三代子」

「じゃあな、いま洗面所で見舞いの花を花瓶かびんに活いけてる彼女は、誰だ？」

「え？」

僕は——思わず身を起こした。

「甲斐甲斐しくお前の面倒みている、あの可愛らしい娘さんは、その森田三代子さんじゃあないのか？」

「ま。待つてください。先輩、僕は——」

深谷さんは僕の右肩に手を掛けて、お前が心配してた通りだつたよと言つた。

「心配——つて」

「お前がおかしかったんだよ」

「な、なんですつて？」

「お前言つてたじゃないかよ。自分の話が全部妄想だつたら、自分はもうかなりおかしいつて。そうだつたんだよ。何もかもお前の妄想だつたんだよ」

「そんな——馬鹿なこと言わないでくださいよ。先輩、真剣に聞いてくれたじゃないですか。解つてくれたじゃないですか」

「解つたさ」

僕は、両肩を押しえられた。

「信じたよ。信じたから心配した。心配したから俺はお前の家に行つたんだ」

「うち——に？」

「ああ。あの日、飲んで別れた後、どうにも気になつたもんでな。行つて良かったよ。森田さんが慌てて、泣いていたよ。お前が帰つて来て、わけの解らないことを喚わめいて大暴れして——倒れたつて」

よく気がつく良い子じゃないかと先輩は言つた。

「待つてくださいよ。だつてあの日」

「あの日も何もないよ。俺が行つた時、まあ部屋は目茶苦茶だつただけだな。お前の言うような様子にはなつてなかつたぞ」

「ゆ、床に、キッチンの床に」

ハヤシライスが溢<sup>あふ</sup>れていたよ。

「ハヤシライスですか？」

「ああ。飯と、ルーと、割れた皿だ。台所の鍋には美味そうな奴が煮えてたぞ」  
「缶詰めは」

「そんなものはなかったよ。まあ、部屋は散らかっていたが、お前が暴れたのだろうさ。大体な、あの水槽には」

ちやんとグッピーが泳いでいたぜ。

「ま、まさか、それは有り得ない。あれはもう腐<sup>く</sup>っていて、酷<sup>ひど</sup>く臭<sup>くさ</sup>っていて、家中が腐臭<sup>くさ</sup>で」

「ハヤシライスの香りがしたよ」

「全部——」

全部僕の妄想なのか。

妄想なんだよと、深谷先輩は子供を諭<sup>さと</sup>すような優しい口調で言った。

「お前は疲れてたんだよ。まあな、ストレスで精神が変調<sup>せんてう</sup>しちまうのは、謂<sup>い</sup>わば現代病<sup>さいたいびやう</sup>つて奴だよ。

俺の会社<sup>かいしゃ</sup>だって、もう何人もやられたぜ。恥<sup>は</sup>じることはないよ。お前はまだ軽い方<sup>かた</sup>さ。それに、あんな出来た彼女<sup>かのじよ</sup>が居るんだから」

できたかのじよ？

幸せ者<sup>さいせき</sup>じゃないかよと、深谷先輩は僕の肩を何度かパンパンと叩いた。同時に病室の扉が開き、薔<sup>ばら</sup>薇<sup>ゐ</sup>だの霞<sup>かすみ</sup>草<sup>くさ</sup>だのを活けた花瓶<sup>けいびん</sup>を手にした三代子が顔を覗<sup>のぞ</sup>かせた。

痣<sup>あざ</sup>はなかった。

絆創膏<sup>ばんそうこう</sup>もない。

もちろん、頸<sup>くび</sup>も折れていなかった。

「郡山<sup>ぐんやま</sup>さん、気がついたんですか——」

「ああ。気がついたようだよ。君の看病<sup>かんびやう</sup>の賜物<sup>たまもの</sup>だ」

そう言<sup>い</sup>つて先輩は僕から離<sup>はな</sup>れ、まあ大事<sup>だいじ</sup>にしるまた来るからなと言<sup>い</sup>つた。

「後は三代子<sup>さんだいこ</sup>さんに任せますよ。まあ、この男は妙な妄想<sup>まうそう</sup>を抱<sup>かか</sup>っていたようだが」

まったく贅<sup>ぜい</sup>沢<sup>たく</sup>な野郎<sup>やろう</sup>だ。

「それじゃあ面会<sup>めんかい</sup>時間も過ぎてるし、僕はこれで」

深谷先輩は三代子<sup>さんだいこ</sup>に一礼<sup>いちれい</sup>してから病室<sup>びやうしつ</sup>を出<sup>で</sup>て行<sup>い</sup>った。

「心配<sup>しんぱい</sup>しました。私<sup>わたし</sup>」

三代子<sup>さんだいこ</sup>は先輩の座<sup>ま</sup>つっていた枕元<sup>まくらもと</sup>の椅子<sup>いす</sup>に座<sup>ま</sup>ると、本当に心配<sup>しんぱい</sup>そうな顔<sup>かほ</sup>で、心配<sup>しんぱい</sup>そうな口調<sup>くちう</sup>で、そう言<sup>い</sup>つた。

「あなたが——あんな乱暴<sup>らんぼう</sup>なことを」



「僕は」

全部妄想——。

そんな。

馬鹿なことがあるか？

僕は暴れたのか、と尋いた。

「ええ。あなたとは思えない、とても乱暴な言葉で私を罵って——」

「それで？」

「折角作ったご飯を叩き落として」

「そ、そして？」

「お盆で私を叩きました」

叩いたんだ。やつぱり。

「ハヤシライスにグリーンピースを載せるなんて許せないから死ねって」

「死ね？」

「そして私の頸を絞めて」

「絞めて？」

殺しましたと三代子は言った。

「ご免なさいもうしないからって、あんなに謝りましたのに——そんなにグリーンピースがお嫌いなのでしたら、<sup>あらかじめ</sup>予め言うてくだされば宜<sup>よろ</sup>しかったのに。私、あなたが厭だと言うなら」

なんでもしますのに。私、あなたが。

「あなたがいないと駄目なんです。私はあなたのものなのですから。私は」

あなたを愛していますもの。

三代子は立ち上がって、閉まっていたカーテンを半分だけ、ぞんざいに開けた。

「私はあなたが厭だと言えば」

「お、お前——」

「そして僕は、あの薄暗い公園のような遊歩道のような場所であの若い男が去り際に吐いた捨て台詞をはつきりと思ひ出した。

「そんな化け物、てめえにやるよ、」

そうか。

石くらいぶつけたくなるよな。石で済ませただけ、お前は大人だよ。僕なんかはもう、酷<sup>ひど</sup>いことしちまったよ。

「外傷はないようなので、明日には退院できるそうですよ。お魚が待っているお家<sup>うち</sup>に帰ったら、あなたの好きな」

ハヤシライスを作ります。  
厭だ。